になって生きているわけではなく、いろいろな環境や状況に従って皆生きている、つまり生かされているわけです。これを人間に置き換えた時、第三者、他者の要求に従い自分の生き方、仕事を営むことは、とても自然の摂理に近いと思うんです。自分から仕事を起こそうとすると自分の自我が出てしまう。自我が出てしまうということが、とても僕にはシンドイことでもあるんですよ（笑）。

DG　では、来るものは拒まずで、お仕事をなさっている。

横尾　そりゃ全部が全部というわけには、ね。逆にあまりにも強い要求には疲れますね。生理的な感覚で仕事を選択するんですよ。ひらめきで選ぶんです。

絵を描くって事は、ヒーリングだ。今すぐ出来る、誰にでも出来る人間的行為そのものなんです

DG　海外からの依頼も多いのですか？

横尾　最近ではね、国連から頼まれてペインティング、油絵の作品を描きましたよ。各国から一名ずつの画家が参加するわけですけどね。

DG　じゃあ日本代表というわけですね。

横尾　そう言われたら気が重いから、軽い気持ちでやりました（笑）。僕の子供の頃の懐かしい記憶を描きました。赤い空にね、星を描いて。そして男の子と女の子が橋を渡っているの。その腰から下は赤い空間の中に消えている……そんな風な絵。

DG　画家の方にとって、最近のCGとかのデジタルな手法は、抵抗を感じるものなのでしょうか？

横尾　もともと僕はデジタルなものに弱いんですよ。機械にも弱いし。もの事をデジタルで捕らえるより、やはりアナログタイプの人間なんです。しかしこの点についても、他人が僕にデジタルな環境を作ってくれるんですよ。僕自身がコンピュータを動かす必要ないし、動かし方を知る必要もない。動かせる他人に指示していけばいいことでしょう。しかも、こういったCGの仕事をするにつけ、不思議にアナログ的な、つまりペインティングの仕事が以前より増えていくんです。一種、危機感とも言うのか、気がつくと自分で〝描く〟仕事が増えている。しかし、CGのような仕事もやりたい欲求が、僕の中に潜在的にあるんですね。そういう潜在的欲求を、本業の創造を通してはき出していくこともまた、創造なんだと思う。浄化されていくというか…。

DG　簡単に言うとバランスをとっていらっしゃるんですね。

横尾　うん、バランスでしょう。対極のものを同時にとり入れる、受け入れることがバランスにつながるんです。仕事、生活、人間関係、すべてにおいて何か一方向、一方的なものに思い入れることはとてもつらいことですから、僕にとって。

DG　ところで横尾さんのお仕事は最終的にはおひとりのことが多いと思いますが、お仕事をしていない時は大勢でワイワイやることなどもお好きですか？

横尾　うーん、そうねぇ知り合いはたくさんいるけれどねぇ、例えばパーティーに行ったりすることって少ないですよ。そういう遊び方とか、誰とかとゴハン一緒に食べたりなんて時間があれば、つまり時間があったらやっぱりアトリエで少しでも絵を描いていたいからね。仕事で出会う人たちとのコミュニケーションも多いわけだし、そういう仕事の打ち合わせして、で、絵を描いて、その間この辺（世田谷の成城）を自転車で走り回っているというのが日常なんですねぇ…（笑）。

DG　でも、それこそが甘い生活ですよ。世の、横尾さんと同世代の60代の男性たちからしたら夢の様な日々です。確かに横尾さんは髪はクログロ、フサフサ、考え方も柔軟性があって若々しいですもの。

横尾　年をとるということに不安感を持たないように出来たらいいんですよね。年をとるということに全精力を傾けないようにする。もっと子供に近づいて行くっていうか、本能的に人間の中には誰もがそういう気持ちを持てるはずなんです。しかし、現実のしがらみの中で、どうもそういう能力を発揮できないで年をとっていってしまうわけですね。僕の場合はね、今が一番健康かなぁって気もしますね。むしろ30代、40代の頃は結構忙し過ぎて睡眠も充分にとれなかったりして。

DG　芸術家には不健康が似合うなんて思われがち。でも、この健康ブーム時代にあって、何か体にいいことをなさっているんですか？

横尾　体にね、悪いことならやってます。甘いものをたくさん食べるとか（笑）。運動はしないし、陽にも当らないし（笑）。でも、酒とタバコは飲まない、吸わない。

DG　絵を描くことが、体にいいのではないですか？　体も心も若々しくいられるのはそのせいもあるのでは。

横尾　絵を描くってことは、現代的に言えば、まさしくヒーリングそのものですよ。誰でも出来る、今すぐにでも出来る